

青森県近代文学館報

特別展「三浦哲郎」開催

会期 平成二十六年七月十二日（土）～九月七日（日）

近代文学館では、平成26年7月12日から9月7日まで、特別展「三浦哲郎」を開催します。

三浦哲郎（一九三一～二〇一〇）は、八戸市生まれ、昭和36年小説「忍ぶ川」で芥川賞を受賞。以後、「拳銃と十五の短篇」で野間文芸賞、「少年讃歌」で日本文学大賞、「白夜を旅する人々」で大佛次郎賞、「じねんじょ」と「みのむし」で川端康成賞、「みちづれ」で伊藤整文学賞を受賞するなど、その作品は高く評価されています。随筆集『一尾の鮎』で「できれば鮎のような姿の作品が書きたい」と記したように、短篇の名手としても知られ、今も多くの読者を得ています。

平成22年7月の逝去まで執筆の意欲を持ち続けた三浦哲郎の生涯と与えられた運命を受け入れさらに強く生きようとする意志を描いた文学活動を紹介しします。



三浦哲郎 原稿「雪の宿にて」



目次

・特別展「三浦哲郎」開催……………	1
・特別展「寺山修司没後三〇年」開催報告……………	2
・特別展記念文学講座・パネル展開催……………	3
・企画展「北畠八穂生誕一一〇年」開催報告……………	4
・北畠八穂の文学・鎌倉山の八穂（佐藤幸子）……………	5
・企画展「大町桂月が描いた青森」よせて（大町芳恵）……………	6

平成二十六年年度企画展

□企画展「棟方志功と青森の文学」

四月二十六日（土）～六月八日（日）

国内外で多くの賞を受賞し「世界のムナカタ」と呼ばれた版画家、棟方志功（一九〇三～一九七五）は青森市出身です。大正13年に上京して絵の勉強に専念し、昭和11年には佐藤一英の詩を版画化した「大和し美し」を発表。13年「善知鳥板画巻」で新文展特選。独自の世界を築き、昭和45年には文化勲章を受章しました。書画や図書など青森出身の文人との交流に由来する資料を多く展示し、棟方志功と青森の文学の関わりについて紹介します。

□企画展「成田千空」

十月十一日（土）～十一月二十四日（月）

成田千空（一九二二～二〇〇七）は、戦後、青森市で俳誌「暖鳥」の創刊に加わり、昭和21年には中村草田男の俳誌「萬緑」に参加。28年、第一回萬緑賞を受賞しました。63年、地元から出版した句集『人日』が俳人協会賞を受賞。平成10年、句集『白光』で県人初の蛇笏賞を受賞しました。また17年から19

・企画展「大町桂月が描いた青森」開催報告……………	7
・全国文学館協議会共同展示……………	7
・新収蔵資料展「高木恭造の世界」開催報告……………	8
・第十二回青森県近代文学館川柳大会……………	8
・資料寄贈者紹介……………	9～11
・朗読会、今月の作家コーナー、館務日誌……………	12

年まで読売新聞俳壇選者を務めました。作品を北の大地より生み続け、全国俳壇に「東北に千空あり」と称えられた成田千空の生涯とその作品を紹介します。

資料集第8輯

寺山修司・草稿「狂人教育」完成

寺山修司の戯曲「狂人教育」は、「新劇」昭和37年12月号に掲載され、その後、戯曲集『血は立ったまま眠っている』（思潮社刊）に収められました。それらの「狂人教育」とは結末が異なる当館蔵の草稿を、このたび写真版化したしました。巻末の解説は清水義和氏（国際寺山修司学会会長）によるものです。

常設展示室展示替え

平成26年度春から寺山修司の草稿「狂人教育」と原稿「歌壇のカルテ」を常設展示いたします。



特別展「寺山修司没後三〇年」開催報告

会期 平成二十五年七月十三日（土）～九月八日（日）

昭和10（一九三五）年、青森県弘前市に生まれた寺山修司は、野脇中学校でガリ版刷りの文芸誌「白鳥」を発行するなど、その早熟な才能を開花させ、県立青森高等学校在学中には全国の高校生の俳句雑誌「牧羊神」を発行しています。早稲田大学在学中には「チェホフ祭」で短歌研究新人賞を受賞しました。

また、寺山の率いる演劇実験室「天井桟敷」は昭和46（一九七二）年ベオグラード国際演劇祭において「邪宗門」でグランプリを受賞するなど、各方面に大きな影響を与えました。

多彩なジャンルで数多くの作品を残し、昭和58（一九八三）年に逝去した寺山修司。本展は、没後三〇年にあたり、寺山修司とふるさと青森の関わりを中心に、寺山修司の文学活動と業績を御紹介したものです。

開催にあたっては、九條今日子氏と三沢市寺山修司記念館、弘前市立郷土文学館、日本現代詩歌文学館をはじめ関係各位の御協力によって、貴重な原稿・遺品等を展示することができました。

本展は、①寺山修司と青森、②寺山修司の詩・短歌・俳句・演劇活動、③寺山修司の足跡を柱として構成しました。図録には、

「三〇年目の帰還」 九條今日子
「寺山修司の俳句に思う―「暖鳥」の関わりを通して―」 新谷ひろし
「寺山修司の短歌 かがやくフレーズ」 梅内美華子

「寺山修司の俳句を散歩すれば」 京武久美
「疾走する少年編集者 ―「白鳥」発見の意義―」 久慈きみ代
「寺山修司の雪」 佐々木英明
「寺山修司と太宰治」 清水義和
「二人のしゅうじ」 三浦雅士
「語られなかった生誕地・弘前」 世良啓
「寺山修司とユーラシアの眼」



「寺山修司と三沢」

山本優

の御寄稿に加え、谷川俊太郎氏の御厚意で寺山に寄せた詩二編を掲載しました。

開会式では、九條今日子氏、佐々木英明寺山修司記念館長、川村進青森県近代文学館長によってテープカットが行われました。

展示資料は、原稿・書簡・図書・遺品など三〇五点。雑誌「短歌」に「パラケルス」のペンネームで発表された、評論「歌壇のカルテ」、エッセイ「ベルシアの市場にて」などの原稿に加え、『歌集 田園に死す』の刊行にあたって「題名を決めてください」と記された塚本邦雄宛書簡（日本現代詩歌文学館蔵など、本展が初展示となった資料もあり、注目されました。

会期中には、県内外から五〇四六名に来館いただきました。

アナウンサーと高校生による朗読会

九月一日（日）

県近代文学館ロビー

県立青森高等学校図書委員

田中知子（NHK青森アナウンサー）

特別展にあわせて県立図書館が企画した朗読会。アナウンサーの田中知子氏の朗読で寺山修司の詩を味わった後、寺山の母校青森高等学校の図書委員が、それぞれ選んだ寺山作品について発表しました。



日曜講座 九月一日（日）

青森県立図書館研修室 参加54名

「青森県近代文学館の資料にみる寺山修司」

飛内文代（青森県近代文学館副参事）

（飛内文代、青森県近代文学館副参事）

第一回文学講座 七月二十八日(日)

青森県総合社会教育センター

参加者 118名

記念講演

「寺山修司と太宰治—二人のしゅうじ—」

清水義和 (国際寺山修司学会会長)

対談

「寺山修司と過ごした日々」

九條今日子 (テラヤマワールド代表)
佐々木英明 (寺山修司記念館館長)

第一回文学講座 講師 清水義和氏

前半の記念講演では清水義和氏が、映像等を交えて、寺山修司作品の視覚化などをめぐってお話しされました。特に、寺山がミュンヘンオリンピックのイベントで、太宰治の「走れメロス」を演劇化したことにふれ、寺山の言葉を引用して「憎むほど太宰治を愛していたのかも



左から九條今日子氏、佐々木英明氏

しれない」と述べられたことが印象に残りました。

後半の対談では、寺山修司と共に生きたお二人が、様々なエピソードを紹介され、負けず嫌いだったり、寂しがりやだったりといった子どものような一面と、言葉に対する鋭い感性や貪欲な創作意欲など、少し人間くさい寺山の姿を感じることができたと好評でした。

第二回文学講座 八月十八日(日)

県立図書館集会室

参加者 73名

寺山修司を知る新谷ひろし氏と研究者久慈きみ代氏、それぞれの視点からの講義は興味深いものでした。



久慈きみ代氏



新谷ひろし氏

・「寺山修司と暖鳥」
新谷ひろし (元「暖鳥」主宰)
「寺山修司のことば—内部から成長を始めるときが来た—」
久慈きみ代 (青森大学教授)

パネル展開催

特別展「寺山修司没後三〇年」をはじめ、地域の施設・学校等の協力を得て開催いたしました。会場・期間は次の通りです。

◇「寺山修司没後三〇年」パネル展

青森高等学校	7月13日～14日
青森東高等学校	10月2日～8日
六戸高等学校	10月11日～12日
八戸中央高等学校	10月18日～19日
弘前工業高等学校	10月19日～20日
県高等学校総合文化祭	10月25日
横浜町立公民館	10月26日～27日
八戸北高等学校	11月6日～12日
黒石高等学校	11月7日～13日
八戸東高等学校	11月13日～19日
弘前学院聖愛高等学校	11月20日～26日
鶴田高等学校	11月20日～27日
◇「北畠八穂生誕一〇〇年」パネル展	
青森明の星高等学校	9月18日～10月3日
◇「鳴海完造と秋田雨雀」パネル展	
音蔵こみせん (黒石)	2月2日～5日
◇「太宰治生誕一〇〇年」パネル展	
イオン葛西店 (東京)	1月21日～24日
◇「陸羯南と正岡子規」パネル展	
イオン葛西店 (東京)	1月28日～31日
◇「太宰治」パネル展	
太宰の宿ふかうら文学館	7月3日～27日
横浜町ふれあいセンターホール	1月16日～31日
◇「寺山修司没後三〇年」パネル展	
「北畠八穂生誕一〇〇年」パネル展	1月7日～14日

県総合社会教育センター

企画展「北畠八穂生誕一一〇年」開催報告



展示会場

御紹介することはもちろんですが、北畠八穂がどれだけ「ふるさと青森」を愛していたかをお伝えできたらと考え展示を構成しました。平成25年4月27日（土）から6月9日（日）までの開催、資料点数は二三五点、二六五名の方に来館していただきました。5月12日には、日曜講座「北畠八穂と青森」を伊藤文一が担当し開催しました。

この企画展に際しては、御遺族の方々から資料提供、情報提供をはじめ多大なる御協力をいただきました。また、『北畠八穂児童文学全集』の表紙画を描かれ、八穂と親交のあった前女子美術大学学長で同学名誉教授でいらつしやる佐野ぬい氏から「北畠八穂先生の思い出」と題した文章を寄せていただきました。



児童文学全集原画の展示

青森市出身の作家北畠八穂は、病によって身体を奪われながらも、終生ふるさと青森を愛し続け、詩情あふれる個性的な作品を書き続けました。昭和46年、68歳のとき『鬼を飼うゴロ』で野間児童文芸賞、サンケイ児童出版文化賞大賞を受賞しました。児童文学作家として著名ですが、自伝的小説、歴史小説、詩、エッセイなど幅広いジャンルで作品を残した青森県を代表する作家です。

平成6年の県近代文学館開館に際し、北畠八穂の御遺族から五千点を超える遺品が当館に寄贈され、その年には「特別展―北方のメルヘン作家―北畠八穂展」を開催、平成15年には「生誕百年記念 収蔵資料展 北畠八穂文庫展」を開催してまいりました。

今回、北畠八穂生誕一一〇年という記念の年にあたり、その生涯と文学活動を

また、『北畠八穂の物語』の著者である佐藤幸子氏からは、八穂の文学を概説した文章「北畠八穂の文学についての一考察」と、著作年表作成のため八穂のも

とを訪ねた際の思い出を綴った文章「鎌倉山の八穂」（これらの文章は今回の館報に転載いたしました）を寄せていただきました。



八穂の着物

今回の展示で特に好評をいただいたのは、八穂の着物の展示でした。肖像写真に写っている羽織や帯等の柄を手がかりに、収蔵資料中から該当の着物を探し出して組み合わせ、その写真とともに展示しました。白黒写真からは分からなかった着物の色合い、布地の質感からは、八穂の息づかいが感じられました。

八穂が女性作家ということもあり、今回は、女性の来館者が多かったようです。また、会場を出られる際、カウンターにいる職員に「八穂さんのこと今まで全然知りませんでした」などと感想を言っている方が普段よりも多かったように思われました。脊椎カリエスという宿痾と闘いながら執筆を続けてきたこと、作家・深田久彌の妻であったこと、小林秀雄、中原中也、中島敦、太宰治、林芙美子等、多くの文人達との濃密な交流があったことなど、北畠八穂についての予備知識無しで訪れた来館者にとつ

ては驚きの連続であったようです。また、パネル中の、故郷青森を思う気持ち綴ったエッセイの抜粋を読み、「八穂さん、いいききやの（八穂さん、いいですよ）」と話しかけてこられた方がいらつしやつたのも印象的でした。

また、今回の展示資料中、「八穂」のペンネームの由来が記された創作ノートや小説「あすならう」、「七穂の経営」草稿などは、途上にある北畠八穂の作品研究にとって重要な位置を占める資料だと思われまふ。展示をきっかけに今後研究が進展することを期待しています。



書斎の復元

（伊藤文一、青森県近代文学館主幹）

北畠八穂の文学・鎌倉山の八穂

佐藤 幸子

八穂の作品の特色について調べてみると、およそ三つにまとめることができると思います。

(一) 詩的リズムを持った文章

(二) 飛躍的で自在な空想

(三) 郷土色あふれる内容

(一) については八穂自身が好んでいた詩人の影響もありますが、作家生活の中でめぐり会ったさまざまな作品・作家らのもたらした文学的栄養がいつの間にか定着して一つの形をとっていると思われる。八穂が初めて自分のお金で買い求めたという『有本芳水詩集』作者の芳水は『日本少年』誌上に感傷的な少年詩をたびたび発表していましたが、女学生頃の八穂の心を刺戟し、夢中にさせたことが想像できます。のちに八穂自身が少女雑誌『ひまわり』や少女少女雑誌『銀河』などにも空想的浪漫的な詩や文章を発表したり、また草野心平発行の詩誌『歷程』に大人向きの詩も発表しているのです。こうした文学の道のりの中で、散文である小説・随筆・児童文学の文体に与えた影響は大きかったのではないのでしょうか。

(二) の自在な空想については夢を与えてくれた祖母(父方、母方ともに)の津軽のむかし話、謡曲の話、姉からの外国のお伽話、兄からの天体、星座の話やギリシャ神話、聖書の話など耳に残っていたと思われます。

(三) の「ふるさと」そのものをずばりと書き、作品の中の場面にも織りまぜながら「ふるさと」青森への懐旧の情とあふる愛を書かずにはいられなかったのは、それだけ八穂自身の魂が生まれた土地から吸収したい飢えのようなものがあつたのでしょうか。

無病な時期は満十二歳から十九歳の間、女学校の専攻科までの七年間のみといます。私は、お下げ髪健康しか知らなかったと言っている位病気の中的人生だったのに、そういう肉体的苦しみに加えて心も傷つけるものがありました。夫の背信と別れ、生涯の病氣、苦しみからの抜け道はなんだったのでしょうか。

うか。不幸を超克したものは第一にふるさと、第二に信仰、皮肉にも闘病の日々には不幸から脱出へと導いてくれました。生活のために、病の中での執筆、病気に耐える力によって光を見る。ふるさとを思うことで立ち上がることができました。(一)(二)(三)の特色は別々のものというよりもこの三者は切り離せない結びつきがあります。



「あんだもどうかおいで下さいへ。上野へついたら山の手セン(国電)で東京駅へ出、ヨコスカ線で、北鎌倉の次の鎌倉でおり、裏駅(進行方向の右がわ)から車で『カマクラヤマ、ワカマツ。江の電分譲地へ曲って、まつすぐさいごの家』てばかりあります。まつてらはで(八穂書簡)

昭和五十四年の秋のことです。来ないと思っていた返事がきたのです。私はこの語りかけにすっかりはまってしまいました。追いかけるように次の便りが届き、「夜キシャさのれば、学校さめいわくさねべし。できれば中一日お休みとれたら、ゆつくりとはなしユサべし。どでごしよ」と勤務校に気を遣う。

鎌倉ゆき決行。「曲ってまつすぐさいごの家」のその先は紅葉の谷。タクシーを降りて降りてあとは散歩。「鎌倉山若

松」のバス停から約二分。「どんじりのこの家はゴロタ石の田舎トリデくさく、ギクツとします」(山家)のトリデ石の塀が尽きると板折戸があり、小鳥の巣箱のような標札にはこの家の住人の名前が白ペンキで書かれてありました。北畠・白柳。白柳美彦さんはもう三十年余りの共同生活者でした。

二階の四畳半の部屋の掘りゴタツの前に、銀髪をきりと結びあげ、小柄な体に明るい紺のウールの茶羽織の八穂がちよこんと坐っていました。その装いは雪の肌の白さによく映えて。カリエスを病んで半世紀、それを切り抜けて生きてきた生命の輝きがまぶしい。

昼食は京の花色の漬けもの。北陸の潮の匂いの魚、などなど。貝がらのような皿におよそ十色のご馳走、八穂流のもてなしです。ぐるりガラス戸の廊下を立てば「オラ家の山家は真西に富士、その右に丹沢、左に箱根伊豆の山なみ、近くに江の島、大島がひと目ですおん」という八穂自慢の眺めが広がり、沈む夕日を背景に富士は黒い姿をくつきりと見せる。「アンダ、ほんとにきょう帰ってしまおうのがア、冬にまた来いへ、冬の黒富士、ワイと二人で見ろべし。きつとだえ」ふりかえった瞳は青く光る湖のようでありました。

(さとうさちこ・青森県郷土作家研究会会員)



企画展「大町桂月が描いた青森」によせて

大町 芳章

桂月が鳥谷部春汀氏のお誘いで、平福百穂氏と共に、十和田湖を訪れたのは明治四十一年のことでした。この旅を「奥羽一周記」（後に「十和田湖」と改題）と題して、雑誌「太陽」に発表した紀行文が桂月が青森を描いた最初のものとなりました。

桂月は生涯を通じて旅することへん好みでしたが、その旅の仕方の特長の一つは訪れた目的地を旺盛な好奇心をもつて見尽すということでした。「同じ山を見るのも東から眺め、西から眺め、近寄って、また遠く離れて眺望する」「一寸見残したことに気がつく」と、疲れた脚、暮れかかる時も構わず、一里、二里と後戻りした」と言われています。初めて十和田湖を訪れたときも、宇樽部、休屋に遊んだ桂月は「幾んど残る限もなく横に十和田湖を見つめたけれど、なおこの上にも縦に十和田湖を見下ろさずんば、未だ全く十和田湖を見たりとは云ふべからず」として宇樽部から舟で青櫓に渡り、御鼻部山に登ります。しかし、この日は霧が深く、十和田湖を眺望することができませんでした。その後、奥入瀬、

葛温泉、松見滝、太素塚などを歴訪しますが、八戸で一行と別れた桂月は一人、青森、弘前、碓ヶ関を経て、再び十和田湖に至り、銀山に宿し、西岸より十和田湖を眺望しています。桂月の旅の一面です。

二回目に青森を訪れたのは、初回訪問から十三年後の大正十年です。この年、桂月は七月から十一月にかけて、北海道の各地を巡り、大雪山を縦走するなどしています。初冬の季節になっていました。酸ヶ湯から、鹿内辰五郎氏の先導で雪の八甲田を越え、途中、山中の炭焼小屋に泊し、葛温泉に至っています。この山行は「雪の八甲田」と題し紀行文を残しています。

桂月は明治二年、土佐藩士の子として、高知城下に生まれ、十一歳のとき、母方の叔父を頼って上京するまでを生地で過します。南国土佐の育ちです。自身を男性的、闘争的な土佐男中の土佐男であるとも書いています。南国特有の常緑樹帯に育ち、土佐男の気質をもつ桂月にとつて、四季それぞれに表情を変えて迎え入れてくれる青森の地は優しく、また魅力に富んだものであったのでしょう。

三回目以降は、しばしば青森を訪れ、愛着を深めていきます。大正十二年、十三年はその日数のほぼ半分を青森県内



旅姿の桂月

で過します。岩木山、下北半島、津軽半島、十二湖、暗門滝などを巡ります。また十二年から十三年にかけてと十三年から十四年にかけての二冬は東京に戻らず、葛温泉で冬籠りと称し越年しています。十四年の賀状には次のような戯歌を作り、書き送っています。

雪とくるまではこもらん山の中

餌をとる役は熊にまかせて

桂月は十一編の紀行文と多くの漢詩、俳句、和歌を残し、青森を描いています。しかし、桂月は単なる旅人として青森を描くことに満足しませんでした。真にその魅力を描くためには、四季を通じて、この地に住み、その自然の中に生活することが必要であると考えたのでしよう。一家をあげて、法奥沢村（十和田市）に本籍を移します。世を去る三ヶ月前のことでした。徹底主義者としての桂月の最後の究極の選択であったと思っっています。まだまだ、描きたいものを残していたのでしようか。

今年、桂月没後八十八年。初めて十和田湖を訪れてからは、一世紀以上の月日が経ちました。今日、この企画展の開催を嬉しく、名誉のことと感謝しております。

（おおまちよしあき・大町桂月孫）

スポット展示開催報告

貴重であるがゆえに、展示機会の少ない資料を、期間限定で公開する「スポット展示」。今年度は以下の通り開催しました。太宰が旧制弘前高校時代に使用した「地図帳」、秋田雨雀の「大正八年郷里旅行漫画」「人物スケッチ」・原稿「九州白杵の思出」が初公開となりました。

太宰治の初公開資料と書画

6月15日（土）～6月30日（日）

今官一原稿「開拓使事始」～北海道酪農の父 エドウィン・ダンを描く～

9月14日（土）～9月29日（日）

秋田雨雀 初展示資料 原稿とスケッチ

12月7日（土）～12月23日（月）



太宰治旧制弘前高校時代の「地図帳」

秋田雨雀「人物スケッチ」
（大正15年）

企画展「大町桂月が描いた青森」開催報告

平成25年10月12日(土)から11月24日(日)まで、企画展「大町桂月が描いた青森」を開催しました。前ページに掲載した大町芳章氏の文章は、企画展示室入口に掲げさせていただいたものです。このほか8名の個人の方、青森県立郷土館、大町桂月を語る会、高知県立文学館、佐井村教育委員会、城ヶ倉観光 葛温泉、太宰の宿 ふうら文学館、日本近代文学館、八甲田神社、富山房インターナショナルの皆様の御協力により、一七六の資料を展示することができました。会期中、二、三、七、九の方が足を運んでくださいました。

大町桂月(一九六九〜一九二五、高知県出身)の文学者としての活動は、大まかに四期に分けられます。第一期は雑誌「帝国文学」に多くの作品を発表し、『美文韻文 花紅葉』(塩井雨江、武島羽衣との共著)や『美文韻文 黄菊白菊』を刊行した時期。続いて、博文館に招かれ評論家として活躍した時期(明治33年

〜39年)。富山房発行の雑誌「学生」の主筆を務めた時期(明治43年〜大正7年)。そして名山踏破10年計画を打ち立て、全国を旅した晩年の時期です。この第四期に葛温泉を拠点に青森県に対する愛着を深め、大正14年6月、葛の地で息を引き取りました。

展示の前半では、二百冊を超えると言われる桂月の著作のうち主要なものを展示。また、明治41年の十和田湖初訪問に由来する資料のコーナーを設けました。鳥谷部春汀(五戸出身)らとの集合写真や、紀行文「奥羽一周記」が掲載された「太陽」第14巻13号を公開しました。特筆すべきは、平福百穂との合作による画賛幅(大町芳章氏御出品)です。百穂の墨絵の上部に桂月が漢詩をしたためたもので、十和田湖が題材となっています。修練を重ね独自の筆法をつかんだ逸話が知られる桂月ですが、それよりも前の筆跡に触れることのできる珍しい資料でした。大町氏の御厚意で、会期



大町桂月と平福百穂による画賛幅



企画展「大町桂月が描いた青森」展示風景

終了後に当館蔵となりました。

後半では、桂月が青森県内を周遊して残した紀行文と、それにまつわる資料を紹介しました。日本近代文学館からは、「中央公論」大正13年7月号に掲載された「陸奥の海岸線」の原稿をお借りしました。蕪島や龍飛岬など県内の名所を描いた箇所を広げ、またサトウユウジ氏から御提供いただいた風景写真を随所に配置。現在の景色と見比べながら、県内の名勝の魅力を桂月の筆で味わうことのできる環境を実現しました。

なお高知県立文学館では、桂月の新収蔵資料コーナーを設けるとともに、それらの写真を当館に提供するという連携企画を行ってくださいました。

11月10日には、日曜講座「青森県内に存在する桂月碑43基」を県立図書館研修室にて開催。本県で最も多くの記念碑を有する文人、大町桂月の足跡をたどり、その文業を偲びました。

(竹浪直人、青森県近代文学館主査)

◆全国文学館協議会共同展示「三・一一文学館からのメッセージ〜天災地変と文学〜」
「三浦哲郎『ユタとふしぎな仲間たち』のもつ力」



昨年度に引き続き、全国文学館協議会では、全国36館が参加し、共同展示を開催しました。今回は「復興に向けての文学館からメッセージ」という趣旨での企画です。

青森県近代文学館では、平成26年3月1日(土)〜3月30日(日)、常設展示室にて、「三浦哲郎『ユタとふしぎな仲間たち』のもつ力」を開催しました。ミュージカルにもなっており親しまれている三浦哲郎の長篇童話「ユタとふしぎな仲間たち」が、平成23年4月30日、八戸市公会堂で青森県立八戸高等学校校演劇部によって上演されました。同年7月から8月には、劇団四季が岩手・宮城・福島3県で公演を行い、人々を励まし続けました。

本展では、八戸東高等学校の御協力を得て、三浦哲郎の作品が発している「強く生きよう」というメッセージを御紹介しました。

新収蔵資料展「高木恭造の世界」開催報告



平成26年1月18日(土)から3月16日(日)まで、新収蔵資料展「高木恭造の世界」を開催しました。

詩人・高木恭造は、一九〇三(明治36)年青森市に生まれました。一九三二(昭和6)年に出版された方言詩集『まるめる』は、20余年の時を経て一九五三(昭和28)年に再刊され、本人による情感あふれる朗読とともに全国に知られることとなりました。しかし、高木恭造の文学活動は、方言詩にとどまるものではなく、小説、随想、戯曲と多岐にわたっています。本展では高木恭造の文学活動の全体像とその背景を、近年新しく当館蔵となった高木恭造ゆかりの資料を中心に二・三の資料とともに紹介しました。

3月9日には日曜講座「新収蔵資料が語る高木恭造の世界」(伊藤担当)、最終日3月16日には、山田尚氏(詩誌「垂土」主宰)、青森明の星高等学校英語科生の朗読による記念朗読会『まるめる』と英訳「Marmelo」を実施しました。

◆高木医院表札・往診鞆・検眼具

高木恭造は、満州医科大学を卒業した医学博士で、終戦後は弘前で眼科医院を開業しました。写真の資料は医院で実際に使われていたものです。

医師の家に生まれ、家業を継ぐことを期待された恭造でしたが、幼い日に見た、患者が苦しみながら死んでいく姿が脳裏を離れず、医師になることを拒み続けます。代用教員、新聞社勤務を経て上京し、出版社に勤務しますが、不況の中で倒産の憂き目に遭い、困窮の末、昭和3年、満州に渡ります。しかしここでも行き詰まり、やむなく満州医科大学を受験、合格してとまどいながら医師の道を歩み始めます。以後、恭造の内面では「詩人」の恭造と、「医師」恭造がことあるごとにいがみ合い、罵り合い、老年に至るまでその葛藤が続きました。



高木眼科医院表札・往診鞆・検眼具

◆模型機関車

満州から引き揚げる際、恭造は、財産とともに、詩稿の全てを捨てて来なければ

ばなりません。己の全てをつぎ込んだ詩稿を失い、恭造は詩作を断念しようとして考えます。



模型機関車

模型機関車の収集が始まったのはそんな時でした。恭造は幼い頃から汽車が好きで、小学校を卒業する頃まで毎日青森駅に行き、貨車の入れ換え作業を眺め続けたといわれています。小学一年生の時母を失った悲しみを慰めてくれたのも汽車でした。25歳で満州に渡った時は満鉄の機関士になるつもりだったといえます。恭造は、少年の日の夢を、模型機関車に乗せて思う存分走らせることで、徐々に「詩人」の心を回復させていきます。その後も恭造は、老年にいたるまで、現実の生活に疲れると、レールを広げては模型機関車を走らせました。

(伊藤文一、青森県近代文学館主幹)

第十二回青森県近代文学館川柳大会

3月2日(日)、第12回青森県近代文学館川柳大会を県立図書館集会所で開催しました。今回の宿題は「白」、「上」、「ほろほろ」、「にじむ」、当日発表の席

題は「高木恭造の往診かばん」でした。高瀬霜石氏による「わたしの川柳」と題したユーモアあふれる講演、また柳誌の展示・交換会も行われ、参加者87名を数える盛会となりました。大会の特選句は次のとおりです。

席題「高木恭造の往診かばん」 内山孤遊選
往診カバンなも涙壺ですじや

席題「高木恭造の往診かばん」 櫛引八千代選
まるめるとカバンが揺れる引き揚げ船

宿題「白」 高橋星湖選
余白を埋める為だけの千人針

宿題「白」 豊巻つくし選
迷いなく子が発つ白い滑走路

宿題「上」 坂本勝子選
頭上から介護の空を剥がせない

宿題「上」 草野力丸選
上澄に父の語録が浮いてくる

宿題「ほろほろ」 赤平くみこ選
淡雪を溶かす小さな喪主の膝

宿題「ほろほろ」 伊藤良彦選
淡雪を溶かす小さな喪主の膝

宿題「にじむ」 船水 葉選
も一人のにじんだ僕は青かった

宿題「にじむ」 外崎まさる選
肩書きが消えても滲むお人柄

太田 久

古川博子

千島鉄男

千島鉄男

櫛引八千代

千島鉄男

工藤青夏

神 千巖

滋野さち

高瀬霜石

内山孤遊選

資料寄贈者紹介

平成25年3月から、平成26年2月にかけて、次の方々から資料を寄贈していただきました。誠にありがとうございました。

今後とも当館への御支援、御協力を賜りますようお願いいたします。

平成26年2月28日現在

今期の御寄贈

- 會津八一記念館―『雁魚來往 第1号』
- 青嶺俳句会―『第九回「俳句のまち八戸」学生俳句大会入選句集』
- 青嶺・森の会―『合同句文集 森のしづく』
- 青森県文芸協会―『藍より青く』他図書・雑誌二冊
- 青森県立美術館―『横尾忠則の「昭和NIPPON」他図書二冊
- あおもり草子編集部―『あおもり草子』通巻二二二号 他雑誌一冊
- 秋田市立雄和図書館―石井露月句碑マップ
- 阿部幹―『呪縛の旅』他図書一冊
- 尼崎市総合文化センター―『文芸作品集』
- 新谷博―『野仏の表情』他図書四冊
- 安城市歴史博物館―『南吉が安城にいた頃』他図書一冊
- 飯田知克―『俳句集 秋茄子』二冊
- 五十嵐勝江―『句集 半生』二冊
- 石井耕―『太宰治と「井伏鱒二選集」』
- 石井頼子―『棟方志功の眼』
- 泉鏡花記念館―『絵本 化鳥』他図書一冊
- 泉谷明―『空にはそと』
- 市川市文学ミュージアム―『水木洋子展』他図書一冊
- 一茶記念館―『一茶研究論集』他図書一冊

- 井上直哉―『火―少年科学防諜作戦―』前・後篇
- 井上康―『バカチンさん』
- いわき市立草野心平記念文学館―『坂本遠展』二冊 他図書一冊
- 上田義弘―天井棧敷「邪宗門」青森公演ボスター
- 雨声会―『続 翠雨雜記』
- 大久保白村―『句集 一都一府六県』二冊 他図書六冊
- 大町芳章―大町桂月・平福百穂画賛幅
- 大湯石材店―『お墓のあるいい未来』二冊
- 大鰐温泉俳句の街づくり実行委員会―『設立二十周年記念誌』
- 小笠原定彦―大町桂月短冊 他図書十一冊
- 小笠原茂介―『詩と思想』通巻322号 他雑誌一冊
- 小笠原眞―『ちよつと私的な詩人論 詩人のポケット』二冊
- 小笠原良一―奥入瀬溪流散策のしおり
- 岡田日郎―『俳句日本百景・百名山』他雑誌一冊
- かごしま近代文学館―『生誕110年 林芙美子展』他図書一冊
- 神奈川文学振興会―『泉鏡花展』他図書一冊
- 金木川柳の会―『創立二十周年記念合同句集 あし』
- 金沢湯涌夢二館―『竹久夢二』
- 鎌倉文学館―『太宰治VS津島修治』他図書一冊
- 上口清次―『こころに言葉の種を蒔く』
- 川口泰英―『後藤伍長は立っていたか』
- 川村慶子―『川村慶子全詩集』他蘭繁之旧蔵図書四六二冊
- 関西エスペラント連盟―『Kuru, Melos!』
- 北九州市市民文化スポーツ局―『第23回北九州市自分史文学賞報告書』他図書一冊
- 北九州市立文学館―『生誕110年 林芙美子展』

- 北九州市立松本清張記念館―『松本清張と邪馬台国』他図書一冊
- 工藤貴子―『オネーギン』他図書六十二冊
- 工藤知明―『無限』第84号
- 黒石川柳社―『川柳くろいし40号記念誌上大会作品集』二冊
- 経済界―『メモは嘘をつかない』
- 高知県立文学館―『近代文学のあけぼの展 自由民権運動と文学』
- 耕発行所―『耕』第28巻第5号 一冊 他雑誌四冊
- こおりやま文学の森資料館―『渡辺淳一と「遠き落日」』
- 小海永二―『小海永二翻訳撰集』全6巻 他図書八冊
- 高志の国文学館―『世界のムナカタ』を育んだ文学と民藝』二冊
- 越野由美子―『タケの色々な話』
- 小菅麻起子―『初期寺山修司研究「チェホフ祭」から「空には本」』
- 後藤斉―『日本エスペラント運動人名事典』
- 小林青山―『根城』第2号 二冊
- さいたま文学館―『校歌―いっばん身近な詩』他雑誌一冊
- 齊藤泥雪―『弘前清水俳句会 弘前千年俳句会 合同句集』
- 斎藤ひでを―『さわやか合同句集 第十集』二冊
- 斎藤三千政―『太宰治を追いかけて』二冊
- 斎藤茂吉記念館―『全国短歌コンクール入選作品集』
- 堺市立文化館 与謝野晶子文芸館―『与謝野晶子・寛 二人の旅』他雑誌一冊
- 榊弘子―『工藤得子関係資料十四点』
- 桜庭和浩―『寺山修司・遊戯の人』他図書一冊
- 佐々木とみ子―『句集 水河の音』
- 佐佐木信綱研究会―『佐佐木信綱研究 創刊0号』

- さつき会―「さつき会たより」第29号
- 佐藤幸子―北畠八穂関係資料二十一点
- 佐藤勇治―『津軽字8号』
- 産経新聞社―『第二回 河野裕子短歌賞』
- 清水義和―『寺山修治 カレイドスコープの新世界』他図書一冊
- 城西川柳愛好会―『手書き地図』二冊
- 昭和館―『中原淳一の生きた戦中・戦後』
- 鈴木喜代春―『自筆原稿十四点 他図書二冊』
- 鈴木廣―『青森版画』第111号
- 世田谷文学館―『帰ってきた寺山修司』
- 仙台文学館―『正岡子規 みちのくの旅は知らない』
- 川柳ひらない吟社―『川柳ひらない』六百号別冊合同句集』
- 高岡市万葉歴史館―『越中万葉をたどる』
- 高田寄生木―『高田寄生木句集 北の炎』
- 高橋憲二―『詩集 深層風景』
- たかなん発行所―『たかなん鑑賞歳時記』二冊
- 竹森絵美―『詩集 観世』
- 竹森茂裕―自作DVD「劇団弘演 太宰治を読む」
- 「太宰治スタディーズ」の会―『太宰治スタディーズ』別冊第1号
- 但野潤―『佳人之奇遇』一巻、二巻
- 蠶の会―『句集 母系の眉』
- ダニエル・アギラル―『Cuentos de cabecera』
- 短歌結社「草の会」―『平成二十四年度歌会詠草集新しき朝』二冊
- 調布市武者小路実篤記念館―『託された思い』他図書一冊
- 津島園子―『太宰治関係資料八点』
- 津幡ひろ子―『弘高』第三十四號 他雑誌二十一冊
- 東京大学大学院総合文化研究科 川中子義勝研究室―『第三次 BR』第1号
- 東京都江戸東京博物館―『東京都江戸東京博物館紀要』第3号

- 童子津軽句会『童子津軽句会十周年記念合同句集』二冊
- 徳島県立文学書道館『写楽太平記』上・下巻 他図書二冊
- 豊巻つくし『鷗盟大学・川柳クラブ 第三〇〇号記念句集 和み』他雑誌一冊
- 中原中也記念館『中原中也研究』第十八号 他図書一冊
- 中村キネ『篝火』二冊 他図書二冊
- 奈良大学博物館『斎藤茂吉(親子) 北杜夫(親友) 辻邦生「三人展」』
- 鳴海顔回『夏灯冬扇』二冊
- 仁科源一『仁科源一詩集 漂遊の罅』他雑誌三冊
- 日本現代詩歌文学館『明日から吹いてくる風』他雑誌三冊
- 俳人協会青森県支部『俳人協会青森県支部のあゆみ』二冊
- 八甲田神社・高松玉麗閣係資料六點
- 八戸市美術館『語り 伝える 絵のチカラ』
- 林誠『画家・書家 中村不折のすべて』
- 坂内徳明『HITOSUBASHI JOURNAL of ARTS AND SCIENCES』Vol. 54 No. 1
- 帆船美術館『画風草創から成熟へ』他図書一冊
- 姫路文学館『司馬遼太郎著・西山英雄装画「播磨灘物語」展』
- 平野敏『詩集 時代の光影』
- 弘前大学出版会『複製 太宰治目録ノート』
- 「ふくい風花随筆文学賞」実行委員会『第16回ふくい風花随筆文学賞 入賞作品集』
- 福井次郎『1950年代生まれの逆襲』他図書一冊
- 福岡市文学館『さとはふくおか』
- 福土修二『天眼抄 佐藤佐太郎墨筆集』他図書三冊
- ふくやま美術館『小林徳三郎研究図録』二冊
- ふくやま文学館『「サヨナラ」ダケガ人生だー詩と随筆 井伏鱒二 没後20年記念特別展』
- 富山房インターナショナル『週刊読書人』第3007号 二部 他雑誌四部
- 藤木俱子『句集 清韻』二冊
- 藤崎紫柳社『むらさき』300号 二冊 他図書一冊
- 藤田晴央『夕顔』
- 船越素子『平島論あるいはとりつく島について』
- 文京区立森鷗外記念館『鷗外の見た風景』他図書一冊
- 文藝春秋『文藝春秋』第92巻第3号
- 平凡社『別冊太陽 寺山修司』二冊
- 勉強出版『東北近代文学事典』
- 政法大学『ポアンナード著作仮目録』
- 北奥文化研究会『北奥文化』第34号
- 北海道立文学館『戦後北海道の演劇』他図書一冊
- 前橋文学館『佐々木幹郎 明日』他図書一冊
- 町田市民文学館ことばらんど『翻刻 八重山吹』他図書二冊
- 松山市立子規記念博物館『第十八回「はがき歌」全国コンテスト作品集』二冊 他図書一冊
- 丸尾翼『成田千空関係資料』二十二点
- 丸山眞男手帖の会『丸山眞男手帖』67
- 三上強二『太宰治』他図書十四冊 特殊資料五十六点
- 水木なまこ『句集 狐火』他図書一冊
- みやこうたを創り楽しむ会『みやこうた作品集』他図書一冊
- 宮崎ともこ『針葉樹』二冊
- 棟方健治『ほーっと青森県』
- 室生犀星記念館『犀星の本づくり』
- 本浜秀彦『高橋竹山記事切り抜き』他図書一冊
- 森井書店『娘たちの夜なべ』
- 森の宝箱実行委員会『森の宝箱』第6集 二冊
- 安田保民『今官一関係資料』二十一点
- 山内恭子・高木恭造関係資料十六点
- 山梨県立文学館『与謝野晶子展』
- やまなし文学賞実行委員会『探骨』
- 米沢菊市・大町桂月関係資料三點
- 林語堂『暖島』第一巻第一号 他雑誌百六冊
- 類家有一『村次郎の行方』二冊

継続的な御寄贈

- 青嶺俳句会『青嶺』
- 青森アララギ会『青森アララギ』
- 青森県歌人懇話会『青森県歌集』
- 青森県観光連盟『おももり教育ガイドブック 2013』
- 青森県教育厚生会『三潮』
- 青森県現代俳句協会『青森県現代俳句年鑑』
- 青森県詩人連盟『詩集 岬 第六集』「県詩集 青森」
- 青森県川柳社『川柳誌「ねぶた」』
- 青森県長寿社会振興センター『あすなろ倶楽部』
- 青森県俳句懇話会『新青森県句集』
- 青森古今短歌会事務局・歌誌『青森古今』
- 青森ベンクラブ『北の邊』
- 新谷博『雪天俳句会「雪天」』
- 井上康『「みちのく春秋」』
- 井上靖記念文化財団『伝書鳩』
- 井上靖研究会『井上靖研究』
- 大久保健峰・豊巻つくし・川柳誌「うまつこ」
- 大阪国際児童文学振興財団『国際児童文学館紀要』
- 大佛次郎記念館『おさらぎ選書』
- 小田桐優子『俳句鼎 妙』
- 鬼「鬼」
- 小山正見『感泣亭秋報』
- 海光発行所『詩誌「海光」』
- 飾画の会『飾画』
- 金沢文化振興財団『研究紀要』
- 北九州市立松本清張記念館『松本清張研究 第十四号』
- 北の会『きたのやかた』
- 北の街社『北の街』
- 木村美映・季刊「美映」
- 陸羯南会『陸羯南会誌』
- 国原社『歌誌「国原」』
- 黒艦隊俳誌『黒艦隊』
- 群系の会『群系』
- 薫風発行所『俳誌「薫風」』
- 勁草社『勁草』
- 月刊弘前編集室『月刊弘前』
- 越谷市立図書館 野口富士文庫『野口富士文庫』
- 小山弘明『光太郎資料39』『光太郎資料40』
- 斎藤茂吉記念館『斎藤茂吉記念歌集 第39集』
- 朔社『詩誌「朔」』
- 此岸俳句会『俳誌「此岸」季刊誌 此岸』
- 自作詩を朗読する会『詩誌「エディデア」』
- 紫明の会『紫明』
- 下北文化社『季刊総合誌「しもきた文化」』
- 渋柿園俳句会『俳誌「渋柿園」』
- 書肆 北奥舎『「北奥氣園」』
- 真朱の会『「真朱」』
- 水星舎『「アトランチスノート」』
- 全国文学館協議会事務局『「全国文学館協議会紀要」』
- 川柳風の会『川柳誌「風紋」』
- 川柳触光舎『「触光」』
- 川柳ゼミ 青い実の会『「青い実」』
- 川柳塔みちのく・川柳誌「川柳塔みちのく」
- 川柳ひらなひ社・川柳誌「川柳ひらなひ」
- 外海吟社『「外海」』

- 泰斗舎―あおもり芸術鑑賞友の会文化情報誌「びーち」
- 高田寄生木―川柳誌「北貌」
- 高山市生涯学習課―「高山市近代文学館調査・研究報告書」
- たかなな発行所―俳誌「たかなな」
- 潮音社―「潮音」
- 胴乱詩社―詩誌「胴乱」
- 十和田かばちえつば川柳吟社―「川柳かばちえつば」
- 中村キネ―「北苑ノート」
- 成田本店―「青春と読書」「図書」「波」
- 新美南吉記念館―「研究紀要」
- 日本近代文学館―「日本近代文学館年誌」
- 日本民主主義文学会弘前支部―「弘前民主文学」
- hishida-do―「本のパーキング」
- 八甲田川柳社―「川柳八甲田」
- 波瀟短歌会青森支部―「波瀟青森」
- 波止場の会―「波止場」
- はまなす発行所―「はまなす」
- 帆船美術館―「風」
- 萬緑青森支部―俳誌「未来」
- 萬緑発行所―「萬緑」
- 姫路文学館―「姫路文学館紀要」
- 弘前詩塾―「弘前詩塾」
- 弘前川柳社―川柳誌「川柳林檎」
- 弘前大学国語国文学会―「弘前大学国語国文学」
- 弘前潮音会―短歌誌「すぺーす」
- 弘前文学学校―「文学いちば」
- 弘前文芸協会―「文芸弘前」
- 弘前ペンクラブ事務局―「弘前ペンクラブニュース」
- 福田正夫詩の会―「焰」
- ふくやま文学館―『福山の文学 第十五集』
- ふだん記津軽グループ―「ふだん記津軽」
- 文藝軌道の会―「文藝軌道」

- 文団・遙―「遙」
- 北狄社―「北狄」
- 前橋文学館―「前橋文学館研究紀要」
- 松丘保養園慰安会―「甲田の裾」
- 無名群社―「無名群」
- 「群山」青森短歌会―「朔天」
- 安田保民―「個」
- 山田尚―「亜土 第二次」
- 山梨県立文学館―「紀要 資料と研究」
- 悠短歌会―「悠」
- 樸俳句会―「樸」
- 立教女学院短期大学図書館―「こうふくのクレヨン」
- 瑠璃の会―「瑠璃」
- 若菜の会―「若菜」
- 《館報》
- 青森県総合社会教育センター
- 青森田中学園
- 荒川区教育委員会
- 有島記念館
- 石川近代文学館
- 泉鏡花記念館
- 一茶記念館
- 井上靖記念館
- いわき市立草野心平記念文学館
- 岩手県立埋蔵文化財センター
- 大阪国際児童文学振興財団
- 大島博光記念館
- 大原富枝研究会
- 学習院大学史料館
- かごしま近代文学館・メルヘン館
- 神奈川文学振興会
- 金沢文芸館
- 軽井沢高原文庫

- 川西町フレンドリープラザ
- 北九州市立文学館
- 北九州市立松本清張記念館
- 虚子記念文学館
- 熊本近代文学館
- 高知県立文学館
- こおりやま文学の森資料館
- 高志の国文学館
- 埼玉文芸家集団
- 斎藤茂吉記念館
- 坂の上の雲ミュージアム
- 佐々木基一全集刊行会
- 佐藤春夫記念館
- GCM庚申庵倶楽部
- 白鳥省吾研究会事務局
- 杉並区立郷土博物館
- 世田谷文学館
- せたがや文化財団
- 全国文学館協議会事務局
- 仙台文学館
- 台東区立中央図書館 池波正太郎記念文庫
- 鷹山宇一記念美術館友の会
- 調布市武者小路実篤記念館
- 壺井栄文学館
- 東京都江戸東京博物館
- 藤村記念館
- 東北大学史料館
- 東北大学総合芸術博物館
- 徳島県立文学書道館
- 十和田市立新渡戸記念館
- 中原中也記念館
- 新美南吉生誕100年記念事業実行委員会
- 日本近代文学会関西支部
- 日本近代文学館
- 日本現代詩歌文学館
- 俳人協会

- 俳人協会青森県支部
 - 原阿佐緒記念館
 - 姫路文学館
 - 弘前市立郷土文学館
 - 福岡市文学館
 - 文京区立森鷗外記念館
 - 北海道立文学館
 - 前橋文学館
 - 松山市立子規記念博物館
 - 松山大学
 - 三浦綾子記念文学館
 - 三鷹市山本有三記念館
 - みちのく北方漁船博物館
 - 宮城二記念館
 - 棟方志功記念館
 - 室生犀星記念館
 - 盛岡てがみ館
 - 山梨県立文学館
 - 吉川英治記念館
 - 吉野作造記念館
- (寄贈者名は五十音順で敬称を略しました。表記は資料に従って掲載いたしました。)

「日曜は…午後の朗読会へ」実施

「——大人になった今だからわかる本の味わいがある——日曜日の午後、文学館の明るいロビーでソファに腰をおろし、作品に耳をかたむけませんか」
常設展示室内で実施してきた解説員による「ギャラリートーク」をリニューアルし、企画展・特別展の内容に即した作品朗読会を、ソファのある明るい企画展示室前ロビーで実施し、参加された皆さまから好評をいただきました。



ラジオのための叙情詩「山姥」朗読会

「北島八穂生誕二〇年」とともに

- ① 5月19日 『鬼を飼うゴロ』
- ② 5月26日 『耳のそのさかな』
- ③ 6月2日 『マコチン』
- ④ 6月9日 『透きとおった人々』

「寺山修司を聴く」

- ⑤ 8月4日 テラヤマ・メルヘンの世界
——童話「塙の中の鳥」を中心に
コトバに魅入られた少年時代
——作品集『われに五月を』
- ⑥ 8月11日 原風景としての青森
——エッセイから
- ⑦ 8月25日 必聴！ラジオのための叙情詩「山姥」

「大町桂月を聴く」

- ⑧ 9月8日 必聴！ラジオのための叙情詩「山姥」
- ⑨ 10月27日 桂月先生 大いに旅を語る
——「旅の修行」ほか
- ⑩ 11月3日 桂月先生 大いに人を語る
——「恋愛と結婚」ほか
- ⑪ 11月17日 桂月先生 大いに酒を語る
——「酒の利害」ほか
- ⑫ 11月24日 桂月先生 大いに世を語る
——「善悪の感染」ほか

今月の作家コーナー

実証的な太宰治研究で著名であり、当館に多大な御協力をいただいた相馬正一先生の訃報に接し、4月のテーマは「追悼 相馬正一」といたしました。
平成25年度のテーマは、開催中の展覧会の内容と関連させることを意識したラインナップとなっています。
展示内容や各作家の略歴については、当館ホームページ、左記のコーナーで見ることが可能です。

- 4月 追悼 相馬正一
5・6月 北 彰介
6・7月 加藤東離
8・9月 畑中秋穂
10・11月 十和田湖の文学
11・12月 鳥谷部春汀
12・1月 竹内俊吉
2・3月 高松玉麗
- 7・8月 宮川翠雨
9・10月 吹田孤蓬
1・2月 植木曜介



4月展示「追悼 相馬正一」

<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/museum/kongetsu.html>

館務日誌

- 4月27日 企画展「北島八穂生誕二〇年」開会
(5月9日)
4月29日 北島俊子氏他2名来館
4月30日 青森中央高校13名見学
5月12日 日曜講座(伊藤主幹) 参加50名
5月20日 秋田県鹿角市立花輪図書館「文化の旅」
25名見学
5月21日 青森中央短大附属第三幼稚園30名見学
5月22日 青森中央学院大学8名見学、市町村立図書館初任者研修8名見学

5月24日	浦町保育園42名見学	5月24日	道新観光13名見学・スポット展示会官 「原稿「開拓使事始」(9月29日)
5月30日	出前講座(鎌倉文学館・竹浪主査) 参加33名	9月27日	出前講座(青森明の星高等学校・伊藤主幹) 参加120名
6月5日	青森市立荒川中学校2学年生徒68名見学	10月9日	出前講座(青森市中央市民センター・飛内副参事) 参加50名
6月7日	出前講座(寿大学・油川市民センター・伊藤主幹) 参加21名	10月10日	企画展「大町桂月が描いた青森」開会(11月24日)
6月13日	出前講座(むつ市市民センター・市民館・竹浪主査) 参加73名	10月12日	企画展「大町桂月が描いた青森」開会(11月24日)
6月14日	全国文学館協議会総会出席(東京・飛内副参事)	10月17日	俳誌「山火」岡田日郎氏他13名来館
6月15日	スポット展示「太宰治の初公開資料と書画」開会(5月30日)	10月18日	青森南高校1学年6名見学
6月17日	インターンシップ(青森高等学校高等部) 1名	10月19日	出前講座(女性大学・青森市中央市民センター・飛内副参事) 参加25名
6月19日	津島園子氏来館	10月20日	大町芳草夫妻、大町芳通氏来館
6月20日	文学資料調査員会議	10月22日	大町桂月を語る会31名見学
7月3日	インターンシップ(青森市立佃中学校) 4名、出前講座(女性大学・大学院・中央市民センター・竹浪主査) 参加60名	10月23日	蓬田村障害者訓練教室16名見学
7月9日	青森県図書委員研修大会60名見学	10月24日	出前講座(青森中央学院大学公開連続講座・竹浪主査) 参加160名
7月10日	インターンシップ(青森中央高校) 2名	11月1日	防災訓練、資料デジタル化研修(国会図書館関西館・伊藤主幹) 10月25日
7月11日	中央文化保育園19名見学	11月10日	全国文学館協議会総務情報部会(高知県立文学館・竹浪主査) 11月2日
7月13日	インターンシップ(青森中央高校) 2名	11月16日	日曜講座(竹浪主査) 参加25名
7月14日	梅内美華子氏来館	12月6日	子ども司書養成講座(十和田市教育委員会) 30名見学
7月17日	特別展「寺山修司没後30年」開会(9月8日) 九條今日子氏、佐々木英明氏、崎谷康文氏、笹目浩之氏、藤巻健二氏、京武久美氏、久慈きみ代氏来館	12月7日	山内恭子氏(高木恭造三女) 来館
7月20日	出前講座(青森高校・飛内副参事) 参加28名	12月24日	スポット展示「秋田雨雀初展示資料原稿とスケッチ」開会(12月23日)
7月23日	青森県近代文学館評議委員会	1月18日	出前講座(女性大学・大野市民センター・飛内副参事) 参加12名
7月26日	青森明の星高校6名、弘前工業高校3名見学、畑中とほる氏他1名来館	1月26日	新収蔵資料展「高木恭造の世界」開会(3月16日)
7月28日	板柳町子ども司書養成講座14名見学	2月28日	高木保氏(高木恭造甥) 来館
7月30日	青森東高校2学年17名見学、青森西高校1学年5名見学	3月1日	日本ペンクラブ 浅田次郎氏他20名来館
8月2日	第一回文学講座(清水義和氏、九條今日子氏、佐々木英明氏) 参加118名	3月16日	全国文学館協議会共同展示「三・一一文学館からのメッセージ」開会(3月30日)
8月10日	青森高校1学年生徒11名見学	3月2日	第12回青森県近代文学館川柳大会87名
8月18日	日本近代文学会東北・北海道地区合同研究集会シンポジウム(日本現代詩歌文学館・パネラー竹浪主査) 参加60名	3月9日	日曜講座(伊藤主幹) 参加28名
8月23日	第二回文学講座(新谷ひろし氏、久慈きみ代氏) 参加73名	3月16日	新収蔵資料展記念朗読会(山田尚氏・青森明の星高校英語科生)
9月1日	インターンシップ(筑波大学) 1名		
9月5日	日曜講座(飛内副参事) 参加54名		
9月7日	今別町社会福祉協議会28名見学		
9月9日	野辺地町子ども司書養成講座15名見学		
9月9日	弘前学院大学文学部15名見学		

青森県近代文学館報 第三十一号

発行日 平成二十六年三月十九日

編集発行 青森県近代文学館

〒030-0144 青森市荒川字藤戸一九七

電話 〇一七三九一五七五

<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/museum/>